

# 洛友會報

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛 友 会

## 初秋つれづれ

京大名譽教授・工博  
大正6年卒 松田長三郎

○就職難 今年は昭和五十年・戦後三十年・国連三十年の思い出多い年であるが、早くも天高く、気澄む好季となりましたが、今年は九月に入ってからでも、連日摂氏30度を超す酷しい記録的な残暑の年でもあります。かてて加えて、インフレ・不況・物価高と悪条件が重なって戦後最悪の、嘗て無い非常事態と言われる。景気・不景気の循環は世の常であるが、それにしても、石油ショックを契機として急転直下ド到底に落ち込み、大企業はもとより中小企業に至るまで軒並みに不況を啣ち、倒産は勿論、国や地方自治体も赤字に悩み、自治体や大企業でも来年の大学卒業者の採用を見合せる所も多く、大巾な採用減が打ち出されて大きな社会問題にもなり兼ねない。政府も種々の景気浮揚策を考えているが、一方では物価抑制を唱えながら、公共料金値上案等

が臨時国会に出され、これに伴っているいろいろの便乗値上げも次々とおこって困ったことになる。今の臨時国会の雲行きはどうなるか、気を揉ませること夥だしい。しかしこういう不況下にあっても、例えばレジャー関係では早くも年末年始の国内・国外への旅行の勧誘に力めているし、国外線旅客機の日本人乗客が非常に多いことや、外国での金ばなれの良いことなど定評があるが、海外事情の見聞は良いことにはちがいないが、折角貯めた外貨の浪費は心すべきである。

○今昔 外国旅行において大切なものはパスポートであるが、出入国の手続きや税関の検査など随分酷しくなっているようである。我々は落ち着かぬ気持ちでこの水も洩らさぬような関門を通っているが、例の事件を起こす連中

の平然(?)とした度胸と、どこをどう切り抜けるのであるかその手際の良さには全く感心させられる。パスポートについて思い出されることは、戦前と戦後とで多少ちがっていることである。戦前のものは、日本帝国外務大臣位階勲等爵位氏名が書かれているが、戦後のものは日本国外務大臣氏名となっている。戦前・戦後で最も差異のあるのは例えば勲記で、自分の頂いた勲記の戦前・戦後のものは次のように書かれている。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル大日本帝国 天皇ハ(位階勲等氏名)ヲ明治勲章ノ(勲等)ニ叙シ瑞宝章ヲ授ケス即チ此位ニ属スル礼遇及ヒ特権ヲ有セシム

神武天皇即位紀元二千六百年 昭和十五年二月十六日宮城ニ於テ璽ヲ鈐セシム

とあって、次の中央に大日本国璽の大きな国印が捺されて賞勲局總裁の名があり、更に勲等簿冊に第何号を以て記入したと云う同局書記官の名が列なっている。戦後のものは大きさ・形式は同様であるが、次の様に記載されている。

日本国天皇は(勲等氏名)を(勲等)に叙シ瑞宝章を授与する 昭和四十一年十一月三日皇居において璽をおさせる

とあって、やはり中央に元のまま

の大きな大日本国璽の国印がおされていて、内閣総理大臣佐藤栄作、総理府賞勲局長岩倉規夫の連署があり、勲記の番号が記されていて極めて簡素である。敗戦の結果とは言え、実に感無量のものがある。宮中で拝受の当時、一人一人授身の室に呼び入れられて、佐藤総理から陛下に代ってお渡ししますと勲記・勲章を頂いた。これを保官から佩用させて頂いて一同拝謁の間陛下に拝謁、陛下から慰労のお言葉を賜わった。あれから既に十年世の中も激しく変わった。今昔の感一入である。

紀元二千六百年には宮城前広場で盛大な祝賀式典が行われ、全国各地から集列者が特別列車で東上した。私もその光栄に浴したが、思えばこれが大日本帝国最後の華やかな国家的行事であった。その一年方々で建てられた国旗掲揚の石礎には「千載不動」と刻まれている。

○戦前には官吏には勅任官・奏任官・判任官等の別があり、又それぞれに幾階かの階級があった。高等官には一等から八等まであり、一等・二等が勅任官であった。帝国大学には高等官一等の教授が多く、教育重視と云うか厚遇されていた。小さな県では知事も高等官二等であった。

○爆弾騒ぎ 世の中は激しく揺れ動いている。今月末、天皇・皇后両陛下のご訪米に対して種々の動きが報ぜられているが、何としても恙なくこの記念すべき旅行がお済みになることを祈らずにはいられない。米国においては大統領自身でさえ度々ねらわれ、危機一発の所で危うく難を免れたと聞くにつけても、誠に危ない哉の感を深くする。国内における各所の爆弾や火炎瓶騒ぎなど、一連の過激な行動は寒心に堪えぬ。今不幸にして大規模のストでもあって、食糧や物資の輸送が止まった場合、果してどんなことになるか。又一時相当喧ましく唱えられた大地震についても、次々に生起する目まぐるしい社会的問題に目を奪われて影をひそめているが、一度そのような不測の天変地異が起った場

当時新年宴会と三大節など、宮中の賜餐にお召しを受ける機会は願ひ出ればお召しに預かれたが、私はある年義父の大礼服を借りて、二重橋から参内、宮中の皇靈殿・神殿に陛下がお参りになるとき共に拝礼し、その後、豊明殿において両陛下・皇族・列国の大使・参列の諸員と共に賜餐を賜わった。このようなことを回想し昔をなつかしむのも、われまた老いたりの感がする。

合を考えると、実に膚に粟の生ずる思いがする。災害は忘れられた頃にやってくる。(前号で米争動は、昭和七年と記したが、大正七年の誤り)

○読書の秋 書物に親しむ絶好の時期になって来たが、書価はご多分に洩れず大きな値上りで、読書子にとっては大打撃である。年々多くの書物が出版されているが、昨年中に新刊された書物は約二万一千冊とのことであるが、戦後2年目の一九四六年の三四六冊に比すれば、隔世の感がある。当時戦地からの帰還学徒兵諸君は、長年の知識慾の渴望を医やさんものと、例えば西田幾太郎先生の哲学の書など発売の発表があると、書店の前に長蛇の列をなした風景は誠に涙ぐましい感激の思い出であって、当時のこれ等の学徒諸君は今恐らく定年間近かの年齢ではないかと思うのであるが、どういう感懐を抱いておられるであろうか。それにしても書価の高騰は学人にとってはこたえる。専門書ではないが、例えばかの有名なレオナルド・ダ・ヴィンチ。この人は、芸術・科学・技術・哲学など実に多方面に亘って多能多才を発揮した創造力の旺盛な偉人であるが、その全集や最近発見されたマドリッド手稿などは、嬉しいこと

は山々であつてもつい二の足を履むことになる。又最近ではドイツの有名な建築界の異才ブルーノ・タウト。この人はヒトラー旋風を通して来日したのであるが、敦賀に上陸して以来在日あしかけ三年半(離日後トルコに渡り、ここで客死)の間に、彼の目に映じた日本の風物、殊に日本の建築・民家・民芸等に限りなき愛着を覚え、詳細に観察研究して、桂離宮や伊勢神宮など日本独特の優れた建築美の世界的意義を世界に紹介した功績は大と云わねばならぬ。我々は我々の周囲のものに慣れ親しんでいるために、普通のこと、あたり前のこととして看過することが多いが、それが実は素張らしいものであることを外人によって指摘されて、始めて気がつき開眼されると云うことは誠にお恥かしいことである。このタウトを日本へ呼んだきっかけとなったのは、旧知の京都の建築家上野伊三郎氏であるが、同氏からこのことを詳しく聞く機会を永久に失ったことは異々も残念である。同氏はスイスの女性と結婚されていたが、数年前共に亡くなられた。タウトの滞日は必ずしも長くはなかったが、あれだけの観察・記述をなし、しかも夫人が大切に保存されて、夫人の再度の来日によって日本版が出版されていることは慶ばしいことで

ある。幕末以来、外人による日本観察記はシーボルト、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)、ベルツ等の書も見ているが、何れも、われわれの気のつかない長所・短所を挙げていることは、われわれにとって大いに参考になる。今、日本の長所が急速に失われつつあることは惜しい限りである。新刊書は随分高くなって来たことは前述の通りで、不況にも強いと言われて来た出版界も今秋は伸び悩みの由である。しかし古典的な、又は新しい価値ある立派な書物がいろいろの廉価版として出版され、コーヒヤ紅茶一杯位の値段でこういう書物が手に入ることには誠に有り難い。読書の秋におすすめしたいことである。

○国際会議 近來各種の国際会議

が国内・国外で開催されることが多くなって、學術の進歩や友好関係増進に大きな貢献をなしてくるようになったことは慶ばしいことである。例えば最近、8月27日から三日間、仙台で開かれたインタール・ノイズ・75(国際騒音制御会議)は、目下各国で焦眉の問題となつてゐる公害の難点・騒音に対する国際会議で、これは東北大学の二村忠元教授(昭和15年卒)が主宰されたものであるが、25ヶ国から九〇〇名に上る研究者が参加

され、多大の成果を収められたことは慶賀に堪えない。又9月中旬から約10日間ロンドンで開かれた国際照明会議(CIE)委員会には、大谷泰之教授が委員長として委員会を主宰された外、来る一九七九年(電灯発明一〇〇周年)に国際照明会議日本大会の我国への招致に成功されたことはお目出たい。お二人ともこういう会議や委員会の主役を完うされたことは並々ならぬ御苦労であつた。これからはこういう国際会議に出席の機会や商談なども益々多くなって来るが、大体われわれは外国語に弱いと云われるが、しかし若い人も非常に堪能な人も多くなって来ているが、会議は勿論、各種のレセプションなどにおいても、隔意なき意志の疏通や交歓に十分その成果を挙げるには、語学に習熟することが何より大切であると思ふ。若い人はこの点に留意されて、大いに努力せられんことを望みたい。

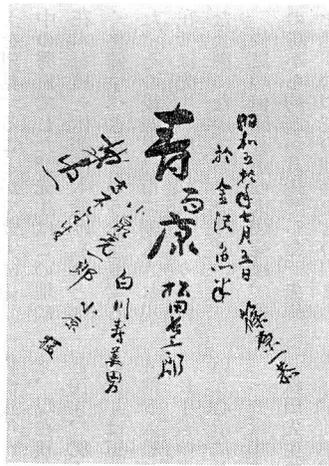
○ブラックホール 私共は幼・少年時代以来、随分多くの物語や小説類を読んで来ている。大人国・小人国さては孫悟空の斬など、幾多の空想的な物語りを楽しんで来ている。人間離れのした壮絶・快絶の愉快な作り話に引き入れられて、我を忘れて読み耽つたこと

も多い。少年時代は現実の社会や環境を離れた勝手な空想を逞ましくする。我々の常識を超えた、突拍子もなく極端に飛躍したありもしない世界に、実感を以て楽しく導びいてくれる。詩人や芸術家達は、空想の限りを尽してこういう世界を展開してくれている。私がかつて幾度か鳴門観潮をしたが、あの大潮に吸い込まれたらどんなことになるかと心を冷やしたことがあるが、近頃よくブラックホールの語を耳にする。バームクーデンの語を耳にする。飛行船でも船でも吸い込まれて消滅する云う斬である。実際にブラックホールを云い出したのは、彼の有名なオツペンハイマーが理論上帰納したことであるが、これに関連して東大の小田教授は、「ブラックホールと連星になつてゐる大きな星から物質がブラックホールに流れ込み、それが吸い込まれて永遠にこの宇宙から失われていく寸前に、激しく放出しているX線を我々が見ているのではないかと想像されるのである」と云つておられる。X線は目には見えないが、X線星の存在は明かである。宇宙の遠い涯にどんな激しい変化が起つているか、それは想像を絶した天空の彼方に生起している現実の現象であり、こういうことを考え出す人間の英知には全く頭の下がる思い

がする。美しい秋の夜空です。光り輝やく無数の星を眺めては、少年時代以来神秘の世界をあらゆる空想を加えて想像して来まし想た。浮世離れたそんなことを空想するだけでも誠に楽しいことでありましょう。月の光が静かに水のように流れています今宵です。

○ジヨコ・スヨト君 先般の昭和25年卒業の25周年記念同窓会において、幹事の人からインドネシアの留学生ジヨコ・スヨト君の消息が伝えられました。過日梅名茂男君と共に突然来訪を受けて大変嬉しく思いました。インドネシアの国鉄で重要な地位におられると思っていました。今はアメリカ国籍をもち、ロサンゼルス附近の海軍造船所の主任電気技師とのことで、お子さんも三人とも大学を出、長男は三年前大学を卒業し、夫人とともに教員をして既に家を買ったとのことであった。大学卒の初任給はたしか七〇〇ドル、土地や家屋は廉い由。日本では一生涯働いても、マイホームはなかなか容易ではない。故国は国情が変わり、同君の友人には大使や高官などもいるとのことであるが、故国を離れたロサンゼルス生活が、彼及び彼一家に多幸ならむことを祈る許りである。同君の現住所は次の通りです。

Djoko Soejoto  
Chief Electrical Engineer  
Long Beach Naval Shipyard.  
Address: 1991 Avenida Feliciano  
San Pedro,  
California 90752  
Tel (213)831-9790



○同窓会 (一)去る七月五日金沢在住の洛友会員諸君が集まって下さいました。いつもよく集って下さった坂井次三郎君の逝去を悼み御冥福をお祈りします。(色紙)  
(二)昭和50年9月20日、昭和20年卒業の卒業30周年記念同窓会が、静岡の旧東海道五十三次の鞠子の宿の由緒ある料亭伝月楼で開かれ、お招きを受けて集えさせてもらいました。集会された方は15名で、お互いに30年振りの再会という人も相当ありました。昭和17年、戦争の真最中、8月16日、京都の大字の真晩で、明日から初まる入学試験は無かったが、宿の人のすすめで大字を拝めば入学出来ると勧め

られて、無事入学できたとの話、この年は学徒動員の初まる年でもあり、食糧事情も悪く、食料切符をもっている時間が過ぎるとありつけなくて、毎日腹のへったことが印象に残っているというよう

なこと、工場や研究所に動員されて、初めてシラミに見参したことなど、終戦前後の得難い懐旧談など、話しは尽く所を知らなかった。折柄中秋の名月が皎々と山の端に上った。それより先き、私の頭は名月には及びもしいが、室内を皎々と照らしていたことは満場の一致する所であった。集会の諸兄、殊に幹事役の老田他四郎・水野勝巳両氏の行き届いたご配慮に厚く御礼を申し上げ、諸兄のご健康を祈ります。上述のような次第で、京の大字は同級生諸兄にとっては忘れ難い印象を刻んでおられるので、来年の同夜には、京都で往昔を偲ぶ同窓会を開催されるように聞き及びました。諸兄は空前の多事多難の秋に入学され卒業されました。当時の思い出等は又とない貴重な歴史ともなりますので、御感想を本誌にお寄せ下さるようお願いいたします。(終)

いろいろなこと

現在闘病中 大正12年卒 山元海門  
「学びやに3とせの教受けたりし恩師迎えし晩春の夜。名物の地酒のすしの忘れ得ずと恩師は欣びたまいてありけり。」

昨年10月岡本先生がお他界なされて既に1年になろうとしています。あの物静かなお風貌や明晰な頭脳によるお講義を思出します。  
先生は私たち同年生が直接授業を受けた最後の恩師でした。大正9年9月に入学した私たちは大正12年3月に卒業し、いわば早生児みたいな存在でありましたが、日曜日を除き毎日午前8時から午後5時まで講義を聴き実験に励み、土曜日には午後2時間位製図にかかり大学の門を出るのは6時頃でした。それでも授業は3学年の1学期で残り残りの学期は休暇も取らず電力会社その他各方面に実習に出かけたのであります。  
岡本先生と私との最後の対面は昭和32年4月下旬で、はや18年になります。はるばる南国鹿児島に出張され、4月27日に岩田太一さんが世話人となり城山麓の閑静な旅館玉村荘に先生を訪いお好物の当地名物の酒ずしを注文し、同窓生の戸山信芳さん大内田敏行さんも参加され打ちとけた歓談をなしたのであります。その翌日2首の拙作をのしましたのでお笑誦に供しましょう。

鳥養先生は最近お健康がお勝れでないよう承りおりますが、思うにまかせずお見舞もできません。先生は私の若い半生を、特別なお心づかいでお指導なしくだされた唯一人の恩師であります。私も入学当時、先生は洋行中で、3学年の1学期中にお帰国なされたので、先生のお講義をお聴きできずじまいでした。私は卒業後いくつかの会社を転職したのであります。が、昭和4年8月から博多湾鉄道KKの電化工事に従事し竣工して3年足らずで退社し、先生のお声がかかり7年2月帝国人絹KKの岩国工場の抽気式発電所の建設工事に従事しました。和田正弘さんの「鳥養先生と人絹工業」という文面(会報の49年8月号)にあるとおりであります。

岩国工場には6年余勤務しましたが、先生はいつも熱意を以てお教導なしくださいました。昭和12年初め工場に電気事故が起り、そ

の責任を負って2月に退職し、京都に転居しましたが1年位は謹慎の予定で、先生のお話で当時の羽村教授がよく面倒を見て下さいました。羽村さんから電気評論に何か書かないかとお勧めがあり「産業電力に関する経済問題」という大それた標題で、13年の3月4月および5月号に連載されてもりました。この内容の一部につき松田先生がお興味をお持ちになり学生のお講義の参考に口授なしくだされたことがあり、某日先生を教官室にお訪ねしていろいろお話を承りました。これが先生との最初にして或は最後の面接であるように思われます。

その後鳥養先生のお世話で松風工業KKに入社しましたが、病氣のため1年足らずで退社し、健康を取戻し当時電気庁の課長であった巽良知さんのお世話で14年3月、日本発送電KK(民有国営の形態で新発足)に入社し、東京に引越これにより鳥養先生に背いたことになり、今でも胸の痛む思がします。その約2年後に第2次世界大戦が勃発し、私は南方派遣の役人となり、約4年後に日本は大敗して終戦を迎えたのであります。

鳥養先生との最近(と言っても20年にもなります)のお面接は昭和30年の初夏の頃でした。先生はロータリークラブの会合で南九州

を巡遊なされ、5月2日夜に玉村荘で九州電力KKの京大卒業生(先生は終戦後京大で学長であらせられた)が主催者となり、前記の岩田さん、大内田さん、それに私も参加して、8人位で歓迎会を催しました。先生は酒にはお強い方でなく、私どもだけが大騒ぎでした。当日午前中は岩田さんの車で、先生を当時吉野村の寺山公園に岩田さんの車でお案内しました。公園の標高は桜島の1/2以下で、四〇〇メートル位で樹木が繁茂し、眺望所は狭い草地の自然公園でした。茶店などなく立ったまままで遠方の景観を鑑賞するので、眼下に錦江湾、目前に桜島の偉容を、また遙か北方に霧島連峰、南方に薩摩富士を望見することができ実に絶景中の秀眉でした。先生はこの地に花木を植え休憩所も設けもつとよく整備すべきだというお意見でした。その後鹿児島市に編入され現在では先生の申されたとおり立派な公園になっております。

桜島の何回目かの大爆発は、その時から約5か月後でした。先生を偲びつつ左の拙作をのしました。(30年10月作) お笑ひなしく下さい。

島芙蓉爆発之賦  
 天空晴朗鳥秋眠、一帯帯水城山近。  
 白帆欸乃夏日海、隔錦江湾霧島遠。  
 激震噴煙冲天涯、火岩降灰人騒然。

松田先生の同年生の生存者は7人で、他界者は26人であるようです。先輩として年賀状の挨拶は保寿康象さんだけになりました。私の同年生は入学当時50人であったのが現在は18人残っております。しかし私どもは不可避の宿命を目前に控えております。

細川頼之の詩の起句「人生五十愧無功」がありますが、彼は75才で世を去り、詩の結句に「起尋彈榻臥清風」とあり「なるほど」と頷ける処があり、私どもも僧籍に入りかかる境涯において世を辞したいものです。

中唐の韓退之が筆禍により左遷せられたときの詩の一節「肯將衰朽惜殘年」とあり、彼はこの時52才、現在残年(老後の身)という70才、80才を想起しますが、彼の没年は57才でした。先生も私も4捨5入して80才です。それでも「長生殿の裏には春秋に富み」という心境になりたいものです。

松田先生の会報お所載の感想、雑感、随想、評論などいつも缺かさず拝読いたしております。現下のわが国情は全く芳ばしくありません。

き政財界や行政面での諸問題が山積しています。煙突のような高層ビル、大部分の庶民が利用しない超高速鉄道など、後者に至っては或る長い区間はトンネル60%、山林野20%、環境は破壊され、動植物は枯死に瀕するに至る。また瀬戸内海の本四架橋その他実施の前提にあり、これらは一面大企業の興隆はある時限において国家の繁栄を招来しようが大きい利益は大企業と政財界の壟断する結果になっております。食糧、燃料その他殆んど外国からの輸入に依存しつつあり、やがてわが国は他国に先がけて行詰る時代が到来するでしょう。例えば高速鉄道の主要部である軌条の耐久力集電装置の機能など最早や使用の限界を超過しています。

現下の状態では天災は人災と協合して襲いかかり、建造物は廃墟と化するに至りましょう。要するに限度を超えた物欲のための技術革新は人類を滅亡に追いやること

になりましょう。先生は内心幾多のお不満や批判をお持ちでしょうが、お立場上発表を控えておいでようです。

クズネツが言ったとおり「資本と努力とは生産力には20%しか役立たず、80%は人間能力の開發即ち技術革新による」のであり、わが直接の恩師鳥養先生は高度の技術革新により多くの事業に貢献されました。特に人絹工業では化学者や機械学者には不可解な現象による故障をも解決されたのです。将来は現代の若い人たちに大きい期待をかけています。

松野保登さんは私と同年卒業生で、昨年75才で交通事故の後遺症が原因で10月8日に他界されました。(岡本先生よりも3日早い) 彼とは卒業証書を手にした日に西東に訣別し、遂に顔を合わず機会がなく、年賀状や暑中見舞の挨拶だけの交際でしたが、約8年前にお互いに漢詩を作ることを知り、その後の通信には必ず漢詩を書き添えたものでした。後には通信文を止めて全面漢詩に変わり、詩体も絶句では物足りなく、律詩または排律体になりました。但し私たちの詩は異色型というよりも、変色型であるように思われます。

彼が自動車事故に遇ったのは45年7月24日(東名高速道路上)で

したが、重症でないにして  
も長い教職(東海大学)も辞  
さねばなりませんでした。  
病中送ってくれた川柳に

「ともかくも生きておるなり虫の  
声。雷もへッを出しての昼寝か  
な」などがありました。

私たちの詩は世情や人生に關す  
るものが多く、彼が昭和44年9月  
に送ってくれたものをお披露しま  
しょう。

秋声 偶感

梧桐乾燥秋風至、蟬叫漸衰虫訴起。  
螢窓灯淡人影無、新宿駅頭電飾輝。  
青年合唱衆和之、学徒一揆不知止。  
大衆動向在那辺、新陳代謝生者理。  
祠堂不解這是事、学徒先師窮処置。  
秋天不高閣雲垂、月明玲瓏何日乎。  
右に対し私から彼に送ったもの  
(同年同月)。お笑吟なしく下さい

迎敬老祝日囀有感

敬老祝旌翻天明、老壯慰樂滿苑庭。  
翁者志老醉美酒、媪者跪坐祈延命。

インペリアル・カレッジ  
に滞在して

京大工電氣第二助手  
昭和四十一年卒

荒木光彦

一九七三年の八月末から今年の  
七月まで、インペリアル・カレッ  
ジの計算・制御学科に客員研究員  
として滞在しておりました。その

ときの印象をまとめてみたいと思  
います。  
インペリアル・カレッジはロン  
ドン大学に属す15のカレッジ(お

鳳知眠偉業不成、南東風雲未熄停。  
故水銀訪中何為、肉損無得処収兵。  
極東倭土端辺狹、北海蘇艦襲漁艇。  
南方繩島米兵駐、学徒驕慢更旺盛。

私は46年3月に軽い脳卒中中で倒  
れ入院し、数日後に次の拙作をも  
のしました。作詩の能力は失われ  
てしまいました。

「右半身まひ不随の老の身は、  
回復の見込なきかと憂う。頭脳の  
痛み前にも増して嵩じて思考の  
年余力衰えてあり」あれ

から4年余り少し身の不自  
由と闘いながら、曇耕雨読  
晴眠の残年を送りつつあり  
ます。 — 終り —

本稿は、松田先生へ—  
「いろいろなこと」と題し  
て、私宛てに頂いたもので  
あるが、お許しを得て本誌に  
掲載させて頂きました。切に  
御加療・御快癒の程を祈り  
上げます。(松田長三郎記)

よびスクール)の一つです。各カ  
レッジは、いくつかの学部を持つ  
独立の大学のようなものです。  
(同じカレッジという名前でも、  
現在のケンブリッジ大学などに  
おけるような、主として学生の生活  
の場を提供するものではありません。)

ケンブリッジ大学には、上記の  
カレッジ等の他に12のインステイ  
テュートと29の医科学校および医  
科研究所があります。正確なところ  
を調べたわけではありません



が、ロンドン大学というのは、上  
記諸機関の連絡機関程度の存在で  
す。制度の面で興味を持ったの  
は、試験問題の作り方でした。各  
科目の担当者は、一定期日までに  
試験問題と模範解答をロンドン大  
学の事務局に提出します。これ  
が、他のカレッジ等の適当な教官  
へ送られて、査読されます。この  
結果、表記や難易度についての意  
見が寄せられ、担当者が問題を変  
えたり、問題の妥当性を説明した

りすることもよくあるようです。  
(以上は学部の期末試験の話で  
す。念のため)カレッジないし  
大学間の相互チェックはP.F.U.の  
審査においても行なわれていまし  
た。P.F.U.の場合は、ロンドン大  
学内のカレッジではなく、他の大  
学から一名を選んで、指導者と二  
人で審査していました。

上のような相互チェックという  
面に限らず、大学間の交流が一般  
に日本より活発であるという印象  
を受けました。たとえば、私のい  
ましたグループでは、平均してほ  
ぼ二週間に一回の割り合いで他大  
学の人を招いて講演をしてもらっ  
ています。また、博士課程の学生  
が、課程の途中で他大学へ移って  
指導をうける事もあります。この  
ような人の交流に対しても自由に  
予算を使える点、うらやましく感  
じました。

インペリアル・カレッジについ  
てもう少し紹介いたしますと、主  
として工学・理学関係の学科・コ  
ースが19あります。各学年約800  
人、大学の教育年限が3年ですか  
ら、全部で約2400人の学部学生が  
いました。大学院には色々な学位を  
とるコースがありますが、全部で  
約1500人の学生がいます。教官の方  
は、教授約80人、リーダー、シニア  
・レクチャー合わせて約100人、  
レクチャー約420人です。私がい

ましたのは、計算制御学科、制御  
部門の理論グループともいう所  
です。(規則などの上でグループ  
が存在しているわけではありませ  
んが、人と人とのつながりで実質  
上一つの単位になっています。)

グループの中に、教授1人、レク  
チャー約7人、技官に相当する  
人が約5人、作業員2人、秘書約  
3人がいます。これだけの人で  
(学部の授業を担当する他に)大  
学院の学生20人程を指導していま  
す。上の他に、客員研究員が常時  
4人程滞在していました。各職種  
の仕事の分担が明確で、事務  
手続なども簡単で、教官は教育・  
研究に専念できるようです。レク  
チャー間でも出版・教務・セミ  
ナなどの仕事を分担していま  
す。このような仕事の分担や、科  
目の配分、学生の扱いなどは、会  
議などを正式に開いて決めるわけ  
でなく、昼食やお茶の時間に教員  
が集ったとき話し合って行くよう  
です。先に述べたグループの出来  
方にする、運営方法にする、日本  
のように形式ばったところがない  
ように思います。大学での一日  
は、朝10時過ぎにコーヒー(30分〜1  
時間)、昼食(1〜2時間)、午  
後3時頃にお茶(30〜1時間)、  
残りが仕事です。アメリカ人に言  
わせれば、コーヒーとお茶を飲み  
に学校へ来ているという事になり

ます。ただし、中には朝8時半頃から夜8時頃まであまり休まず毎日(休日でも)仕事に打ちこんでいる人もいますから、イギリスの大学の教官が皆さぼりだというわけではありません。おおむね、10〜20人の中の1人が非常に頑張っていて、残りの9〜19人は、勉強・仕事などを、スコッシュ、ヨット、テニス、お茶、パーティー、観劇などと同列において悠々と楽しんでるのがイギリスの大学(ひょっとするとイギリス全体)のように見うけました。

だから国際収支が赤字ばかりだということもわかりません。国際収支の悪さも相当なものです。が、それに伴いインフレも日本に劣らず大変でした。73年の到着時に3ペンスだった国内郵便料金(一級書簡)が帰国前には7ペンス、6.5ペンスのコーラの缶が11ペンス、5ペンスの砂糖の袋が30ペンス、ロンドン・バス3ペンスの区間が5ペンスという具合です。(現在英国の通貨は1ポンド=100ペンスという単純なものです。1ポンドが600〜700円ぐらいです)ついでに物の値段を紹介しますと、学生用レストランで夕食を安くあげて50〜70ペンス、1人1室の下宿で安くて月40ポンド、2DKのアパートで月120ポンドぐらいというところです。収入の方は

大学関係しか知りませんが、教授年収六千ポンド前後、レクチャラー(シニア・レクチャラーを含む)が二千四百〜五千ポンド(30才で三千ポンドぐらい)、秘書は経歴年数にもよると思いますが隣の部屋の一例では二千二百ポンドぐらいです。税金のシステムは複雑で毎年変って一定しないようですよ。20〜30%ぐらい払っているようです。

インフレや国際収支以外にも有難くない話題が多く、74年の始めには、炭鉱ストと石油不足がかさなり(前者の方が主な原因と思えます)電力使用が週三日制となりました。週三日を除くと、あとは日照・ろうそく・懐中電燈をたよりに買い物をする事になりました。同じ頃にトイレット・ペーパーが、その年の秋に砂糖が、それに短期間だけですがパンが店頭から姿を消しました。このようにストばかりやっている破産寸前の国というのがこの国の一つの顔です。しかし、それだからといって暮しが陰気になったり、じたばたしたりという様子は感じられませんでした。トイレット・ペーパーや砂糖がなくなりかけても、とり合いをしたり、持てるだけ買い込んだりという光景もみかけませんでした。経済状態が悪くなっているといっても、夏には家族で旅行

に出かけ、パーティーをやり、スポーツを楽しむ(以上レクチャラー連中)もしくはバブに坐り込んで仕事はほどほどにするというのは変りないようです。もともと、旅行などにまとまったお金を使う一方、普段の生活については随分しまり屋です。昼食なども質素で、割れた陶器などのもりづけして使ったりします(これは、陶器が相対的に貴重品であったためもあると思います。今でも日本と比べると陶器の値段は高いと思えます)。ロンドン市内では洗濯機のない家も多く、カラテレビは珍しい品物に属すようです。収入は日本と同じぐらいで、使い道が違ふというところのようです。

食べる事について一言。イギリスの料理はまずいというのが日本での定説と思えます。到着したころ学生寮や中級以下のホテル(高級な所は泊ったことがあります)で経験しましたところでは、うわさにたがわず……という印象でした。また、自動車道路ぞいのレストランは、どこへ行っても同じメニューでしかも種類が少く、旅の楽しみの一つが欠けてしまします。しかし、田舎の農家に泊ったときの食事は、珍しいものが出てくるわけではないのですが、毎日おいしいと思っただけで、同僚の家庭へ招かれ

たときの食事には、色々な外国風のものを取り入れた、種類に富んだものがよく出されました。彼等の話では、親達は今でも頑固に昔風のまじい食事を続けているが、若い連中は新しいものをどんどん試してみることから、十年もたてば食生活も随分変っているだろうという事です。もともと、これは大学に在るような好奇心旺盛なクラスの人々の話で、たとえば八百屋で働いている人などでは、商売物の外来の野菜の料理法を知らない(もちろん食べたこともない)人の方が多いようです。食事が革命的に変わるなどというのは大分先のことでしょう。ロンドン市内には中華料理店やイタリア料理店など外国料理の店が多く、色々楽しめます。これらの店では、料理人からボーイにいたるまでその国の人が働いている場合が多く、料理の内容もそれほど変形されていないらしいです。(少くとも中華料理については、まあまあ本式の広東料理で満足すべきものだというのが、知り合いの中国人達の意見です)。

以上のように、料理の方は場所さえ選べばおいしいものがあるわけですが、食器の洗い方には閉口しました。まず、洗い桶またはシンクに適当な濃度の洗剤の水溶液を作ります。そこへ洗うべき食器

を全部つけておきます。(ここまでは文句ありません)つぎに、ナイロンタワシなどで食器を一つづつなぞって、水切りかごにほりこみます。(これが洗う作業のほんの一段階というなら、それも結構なのですが)水がほぼ切れたところで、アイリッシュ・リネンなどのふきんで少し力を入れてふいて、それで終り。(この最終工程で汚れのかんりの部分が拭い取られているようです。イギリスの照明は一般に暗いので目立ちませんが、汚れが残っていることも珍しくありません。洗剤は当然残っているでしょう)。私達自身直接目撃したのは、4つの家庭とプリー・グループ、食堂といったところだけですが、他の日本人の話を合せてみますと、上記が一般的工程のようです。流しやガスをピカピカに磨き上げておくことには随分気がつかっているようですから、目のつけ所の違いでしょうか。

以上の他、三面記事主体の新聞が発行部数の大部分を占めていること、ターナの絵が風景そのままであること、イギリスの家の庭にバラがきれいに咲いているのは、住む人に美を愛する心が豊富にあるから(だけ)ではなくて、主に害虫がいらないためであること、照明を暗くしているのは、落着いた

雰囲気愛し女性の化粧を引き立たせるといふ表向きの理由ばかりでなく、電気代を節約しアラを隠すため、もしくは家の耐用年数が長くて改造が難しく、また彼等が明るい光に慣れていない(実際、10月〜4月はうす暗い冬が続きます。夏になっても日本のようなカッと照りつける太陽はなく、極端に言えば、春のあけぼのか秋の夕暮という感じです)。ためであること、ロンドンからインド人・アフリカ人・イタリヤ人……などの外国人がいなくなれば地下鉄は停止し、ゴミは山と積まれ、医者は不足し、レストランは休業となるであろうこと、それでも平均のイギリス人はかなりの外人嫌いであ

ること、イギリス人の入浴回数が平均週一回以下であろうことなど、色々と見聞きしたり臆測したりして面白がっていた次第です。意地悪な外人むきの話の種にはまだまだ事欠がない国でしたが、二年間の印象をまとめてしましますと、話し合いながら一つ一つ事を進めていくのが習慣として身についてしまっている、その為に生じる不都合があったとしても、それは物を作るのに材料がいるような当然のことで、問題にするつもりもない、また社会での位置が一人一人違うのもごくあたりまえのこととで特に意識するわけでもない、というような人々の暮しぶりに落ちつきましようか。

### 阪口先生の一周年にあたって

京都工芸繊維大学助教授  
昭和三十三年卒 西村 武

今日は大文字の送り火の日である。去年も送り火を大学の屋上から眺めていた。その送り火を追うようにして阪口先生が亡くなったという知らせを受けたのは翌十七日だった。ちょうど一年経った今年のお盆に、阪口先生のお宅を訪ねて御仏前にお参りをさせて頂いた。合掌の後、奥様と少しお話をしているうち、奥様は私に、「この頃、音楽の方はいかがですか」とお

尋ねになった。そして「昔は京大のオーケストラも聴いたことがありません。西村君が棒を振るのだといつて主人が連れて行ってくれました」とおっしゃったのだった。在学中の私はオーケストラに夢中で、卒研などとかくさぼりがちであった。時とすると、楽器を持って研究室を逃げ出すところを先生に見つかることもあって、そういうとき、先生は、「何や、また

音楽か」と一言おっしゃるきりだった。サボリ屋の私にとつてはこういった先生はやはり怖い存在だったし、こそこそと練習場へ向う私を先生はどのように御覧になっていたのか、わからなかった。卒業して会社に勤めるようになってからも仕事の関係で先生の御指導を仰ぐ機会は多かつたし、ことに先生の御口添えで工芸繊維大学に奉職するようになってからは、学位論文を見て頂いたり、非力の私を励まして下さったり、殊の他目をかけて頂いていたのだけれど、やっぱり、ちょっと怖いという感じは残っていたのだった。

奥様のお話には私は、はっとした。そうだったのか。奥様のお話によつても、特に音楽がお好きでもなかった先生が、一人の卒研生だったに過ぎない私の演奏をわざわざ聴きにきて下さっていたのか。何もおっしゃらない先生はそんなにも私たち弟子のことを愛しておられたのか。そんな先生の心を見抜けなかった自分が恥ずかしかつた。

奥様ととりとめのない話をし、おいとましてから、研究室に帰って一人きりになったら、万感胸に迫つて来て、泣き出してしまった。一度泣き出したら、あとからあとから涙が溢れ出て来て止らなかつた。

このような恩師を持つことができたというのは、何と幸福なことなのだろう。そして再びお教えを乞うことができないのは、何と悲しいことなのだろう。いまこれを書いてるうちに、また涙が溢れてくるのを感じながら、ひたすら先生の御冥福を祈っている今年の大文字の夜である。

(昭和五〇年八月十六日夜)

#### 研究室紹介

母校の電気関係教室は、情報工学教室および研究施設などを含めると三十講座あまりにもなり、それら研究室のカバーする研究分野も時代を追つて新しくなつて来ております。今回からこれら研究室の活動を卒業生諸氏に紹介するため「研究室紹介」のコラムをもうけました。毎号二研究室程度ずつ掲載致しますので原稿執筆の方も宜しく願ひ致します。

(編集幹事)

#### 高周波工学講座

この講座は電子工学教室に属しており、マイクロ波、ミリ波、さらに、光波の領域に至るまでの回路および回路素子に関連した研究を行なっている。現在、主として行なっている研究は次の通りである。

1. マイクロ波回路に関する研究

半導体素子は小形、軽量であるのでマイクロ波領域においても広く使用されつつある。マイクロ波領域で使用される独特の発振素子としてはガン・ダイオードおよびインパット・ダイオードが代表的なものであり、これらの発振素子は次第に性能が上がり、大きな出力を発生出来るようになったが、用途によっては未だ充分とは言えない状況にある。一方、これらの発振器は発振周波数に近い周波数の外部信号に容易に同期する特性を持っているので、この特性を利用し、いくつもの発振器を同期発振させ、大きな出力を取り出すことが出来る。われわれの研究室では、これら発振器の同期現象の解析、同期発振回路方式の検討などを行ない、種々興味ある現象を見出すとともに特長ある同期発振回路方式を考案している。

同期発振は対等の立場にある発振器が相互に同期し合う現象であるが、一定周波数の信号を発振器に注入し、発振器を注入信号に一方的に引込ませることも勿論可能であつて、この現象を利用して、発振器の雑音を小さくし、周波数安定度を向上させることが出来る。また、この注入同期現象はP S K波のように位相に情報を含む信号の増巾にも利用出来る可能性があるので、その特性の検討を行

ない、興味ある結果を得ている。半導体素子の使用により機器を小形、軽量化することが可能であるが、それには回路として導波管を使用しないでストリップ線路(平面回路)を使用せねばならない。この観点から平面回路に関する研究も進めている。マイクロ波機器の小形、軽量化の要求は衛星搭載用機器、将来予想される衛星放送の各家庭における直接受信などに対して、今後も益々高まってくるものと思う。

### 2. 静磁波に関する研究

直流磁界を加えた低損失の磁性体、たとえば、YIG(イットリウム・アイアン・ガーネット)中には静磁波が伝搬する。静磁波は伝搬速度が遅く(光速の10<sup>-6</sup>~10<sup>-9</sup>)、一周波数分散性の著しい特殊な波であり、磁性体の弾性波と結合して磁気弾性波となったり、また、表面波として伝搬するなど、種々興味ある伝搬特性をもっている。静磁波はその特性から考えて、遅波回路、非可逆回路、チャンネルングによるパルス幅圧縮、回路の小形化などに利用出来る可能性はある。しかし、伝搬損失が大きく、励振能率が悪いので、われわれの研究室では伝搬特性の検討を行なうことも能率よい励振方法の研究、および、YIG表面に密着した半導体薄膜中の電子流と

の相互作用による増巾あるいは減衰の軽減の可能性を探索している。

### 3. レーザーに関する研究

レーザーは一般に多モードで共振し、各共振モードが互に影響し合っているが、これらのモードが同期状態に入ると巾の狭いパルス発振をする。この現象はモード同期と呼ばれ、安定なパルス発振をさせたり、大きなパルス出力を得るのに利用されている。モード同期は理論的にも種々興味深い現象であるので、われわれはこの現象の解明を行なってきた。また、モード同期により得られる超短光パルス(ピコパルス)の測定法についても研究している。

光波はミリ波に比べても周波数が10<sup>3</sup>~10<sup>4</sup>倍であるので超多重通信に利用出来る可能性がある。最近、極めて伝送損失の小さい(数dB/km)ファイバー線路が開発されたことにより光通信が急速に現実的なものとなってきた。しかし、ファイバー線路でシングルモードを伝送し、光波の高周波性を利用しつくすには未だ解決すべき技術上の問題が多く残っている。帯域は狭いが多モード伝送による光通信が先ず実現するものと思われる。ファイバー線路による光通信には、半導体レーザーを使用し、回路を集積化することが

考えられ、光回路集積化の研究が活発になってきた。このような状況に鑑み、われわれの研究室でも光導波回路関係の研究を始めている。

構成員：教 授 池上淳一  
助 教 中島将光  
助 手 栗井郁雄  
非常勤講師 宮下豊勝

### 計測制御工学講座

(電気工学教室)

われわれの講座は計測と、その結果得られる情報に基づいて、システムの制御を行う学問・技術分野の教育と研究を担当することになってきている。新しいスタッフによる講座の発足(昭和47年度)以来未だ日も浅く、現在までのところ計測そのものに関する研究は殆んど行っていない。むしろシステムの解析、計画、設計、制御、シミュレーションといった面に力を注いできたが、今後は小型コンピュータによる計測情報の処理などにも新しい分野を開拓したいと考えている。

現在の研究テーマを整理してみると、おおよそ次のようになる。

#### I 基礎的理論的研究

(1) システムの同定及び最適制御、最適決定

実在のシステムを考察、研究の対象にしようとするとき、まずそ

れを何らかのモデルとして、概念的に、更には数量的に定式化することが必要不可欠である。これを同定或いはモデリングと呼んでいるが、システムの主要な変量を抽出して構造を同定し、またパラメータ値を推定する手法やアルゴリズムの研究を行っている。また得られたモデルに基づいて、システムの最適制御や最適化をはかることが別の重要な問題であるが、最適化と同定の手法には共通な点も多く、また両者を並列的に行うことはじめて有効な成果を期待できる場合も少くない。このテーマは制御及びORの両分野にまたがっているが、われわれは特に、複合大規模システム、非線形性や確率的変動を伴うシステムの理論と計算アルゴリズムを重点課題としている。

(3) システム・シミュレーション

特に構成要素の特性や要素間の関連が複雑な場合、或いはそれが明確に同定し難い場合には、数理的手段が十分に効力を発揮し得ないので、ある程度の仮定を含んだモデリング及びそれに基づくコンピュータ・シミュレーションが必要になる。それらの方法論及び応用について研究している。

(4) その他、非線形電気系、力学系の振動や安定性に関する研究も行っている。

### II 応用的研究

現在進行中のテーマから主なものをひろってみよう。

(1) 電話通信路の信号伝送特性の同定とエコー・キャンセラー設計への応用。(KDD研究所と共同研究)

(2) 交通流関係、都市街路における交通流のシミュレーションとそれによる制御方式の研究。交通流の最適配分のグラフ理論的研究とアルゴリズム。

(3) 環境汚染制御のための情報処理と評価に関する研究。(文部省特定研究の一環)

(4) 地域社会の診断と計画のためのモデリングとシミュレーション。地域情報処理についての研究も含む。農学部その他との共同研究)

以上のように、応用研究のテ

#### (2) 多目的システムとゲームの理論

実在のシステムの計画、設計や制御では、目的や評価の基準が単一ではなく、複数の基準を考慮しなければならぬ場合が極めて多い。またそれと関連して、決定機能を一個所に集中せず、適宜複数の者が分担する分散制御システムや、それぞれ異った目的をもつ複数者による不完全情報下の意思決定の問題、いわゆるゲームの問題についても、研究を進めている。

マとしては、電気そのものの問題よりもむしろ他分野への応用が多い。電気の問題を避けたり軽視したりしているわけでは決してないが、われわれ電気屋はフロア或いはフロア・システムに関して、またコンピュータを中心とする広い意味での情報処理に関して、基礎的知識や技術を豊富にもっており、現在種々の分野でそれらの活用が強く求められていることも確かであろう。その意味で、いわゆるインターディシプリナリーな分野で積極性と指導性をもって仕事を努力は、意義のあることと考えている。

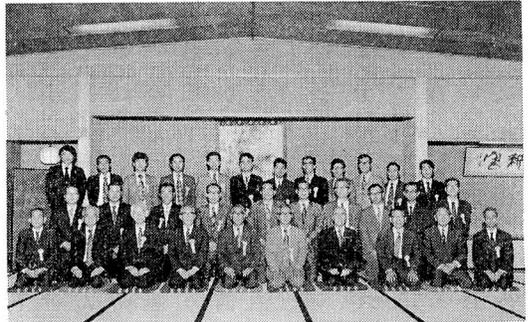
従来から洛友会員諸兄との交流を通じて、われわれの仕事がアクティベートされたことも少なくなかった。今後共々鞭撻を賜りたい。講座のスタッフは、西川禎一教授、板倉秀清、宇土顕彦の両助手であるが、他に三宮信夫講師も一緒に仕事をする機会が多い。なお現在、大学院生9名、研修員2名（他大学及び会社）及び外国人（トルコ）研究留学生1名が在籍している。

以上

**昭和三十九年度洛友会  
四国支部総会記**

去る六月十四日（土）、洛友会四国支部総会が高松市「紅羽」にて

第二十回洛友会四国支部総会  
昭和四十年六月十四日於紅羽



開催された。

総会には教室から近藤文治、上之園親佐両教授はか、本部から山本幹事をお迎えし、出席者は三十二名となり、出席率は三十八%であった。

まず支部長挨拶のあと、幹事から昭和四十九年度会務報告、決算報告がされ、続いて昭和五十年年度予算案が審議され、可決された。また近藤、上之園両教授から教室の近況報告などがあり、総会を終了した。引き続き懇親会が開催され、夜の更けるまで歓をつくり、盛会のうち閉会した。なお役員改選による新役員はつ

ぎのとおりとなった。

- 支部長 阿部 要（昭八年卒）
- 副支部長 仁田工吉（昭九年卒）
- 幹 事 土井正之（昭二十三年卒）
- 森本俊三（昭二十六年卒）
- 近藤耕三（昭二十八年卒）

**洛友会東北支部  
第一〇回総会報告**

昭和五〇年六月

第一〇回東北支部総会は6月21日仙台市の大町電力ビルにおいて開催されました。

本部より近藤教授をお迎えし、支部より平井支部長をはじめ13名のご出席がありました。

支部長のご挨拶に続いて近藤先生より洛友会本部総会の模様、特に会の収支状況とこれに伴う会費値上げの経緯等詳細御報告のあった後、大学の近況、電気工学科の諸先生方の御消息などお話し願ひ、後議事に入り会計報告、会員の移動等発表があり、総会は滞りなく終了致しました。

総会後、恒例により近藤先生より「省力・自動化の最近の話題」について講話を戴き、最近の不況下にある合理化に対する考え方、技術進歩等感銘を深く致しました。

引き続き懇親会に入り最近の学生気質、就職状況、懐かしい電気科の赤レンガ本館の存廃をめぐる話題等話はずきずき、時のたつのも忘れる楽しいひとときを過ぎました。

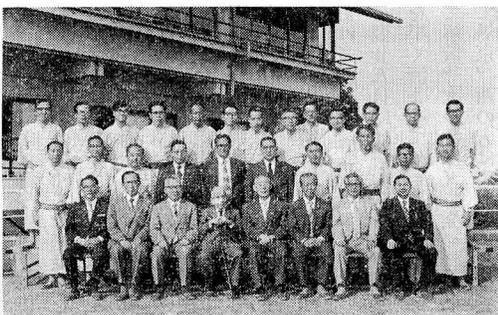


**昭和二十五年卒業同窓会**

六月一日、日曜日の午後、人影の見えない静かな京大電気教室の正門前に、何処からともなく一人、二人と、中年の背広姿が集まって来た。

お互いに顔を見合わせ、数分間思案した後で、ドッと歓声が起こり、握手し合い、すっかり打ち融けたダバリの輪が広がってゆく。これは昭和二十五年卒業組の二十五周年記念同窓会集合の風景であった。

集まった二十六名の大半は、二十五周年振りの会合である。すっか



京都大学電気工学科卒業二十五年記念同窓会  
昭和五十年六月一日於叡山閣

り頭の禿げた者、白くなった者、夫々四半世紀の長い才月のあとが伺えるが、やはり学生時代の面影は何処かに残っていた。すっかり変わった電気教室を見学した後、バスで叡山園に登り、阿部、松田、林、大谷、近藤の五先生を迎えて会食した。この日は奇しくも阿部先生の八十三回、近藤先生の五十七回誕生日に当り、バスデーケーキを贈って全員でお祝した。

自己紹介に続き、先生方から京大の現状報告など聞くうちに予定時間も過ぎ、次回三十周年記念の再会を約して、名残りを惜しみつつ散会、下山した。(藤島記)

計 報

明40年卒 宮井 誠吉 50・5  
 昭3年卒 酒井 直寿 50・2  
 講大11卒 吉田 平三 50・5  
 講大7卒 井口 誠一 50・8  
 講大10卒 白勢日出男 49・2  
 以上の方々が、ご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

昭六会 四十四周年同窓会

五年間隔では長が過ぎるというので決めた昨年開催の予定が延びて今回の催。少し目先を変えて東北方への旅行とは相成った。

八月廿二日(金)

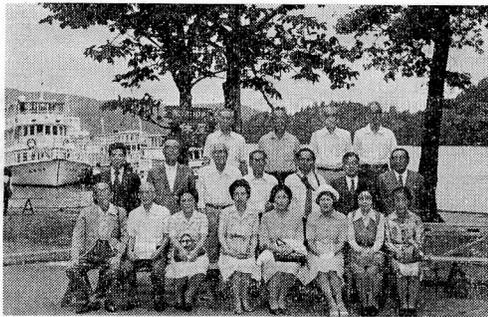
最初は廿三日早朝青森集合の計画であったが、寝台券が取れないので東京勢十三人は朝の特急で、関西の四人は午後早々ので青森に向け出発。沖繩から帰って来た宇野夫妻、宮崎から参加の町田夫妻は朝の部に加わり、旧交を温めて車中では話が弾む。ただ心配なのは台風六号の行方。十八時青森に着き駅近くの青森国際ホテルに荷を解く。小雨の中を早々に出かけて近くの喜多八といううまいとんかつやに赴き、賑かな前夜祭が始まる。このとんかつやの主人は藤田真君の旧部下で、同君の肝入りでなかなかよくしてくれた。関西方は夜おそく着きホテル青森に泊る。

八月廿三日(土)

雨はどうやら上ったが、台風六号は早朝に神戸に上陸したとのニュース。喜多八に東西合流しておやし心尽しの朝食を頂く。昨夜おそく着いた伊藤俊夫夫妻は、台風上陸の報にその責任上急ぎ帰阪することになる。

九時前一行十七名は伊藤夫妻に別れを告げ、大型バスに乗り込み青森出発。八甲田山の裾にかかる朝霧に包まれたが、高く登るにつれ又晴れてくる。山を越すと酸ヶ湯等温泉が多い。間もなく奥入瀬溪流に出る。台風五号による奔流に木石が流され惨たんたる光景であった。バス道路もやっと今朝通じたとのことでラッキーであった。沿道は樹木が茂り、十一月下旬には紅葉が素晴らしいという。滝が多くかかり、木の間を吹く風は爽かで仙境を往くの思があった。

十一時子ノ口に着き船にて十和田湖を渡る。日本三番目の深さとのことにて水は青緑色にて美しい。十和田観光ホテルの中食では



昭六会 於十和田湖  
昭和五十年八月二十三日

ヒメマスがおいしかった。記念写真をとる。午後三時半頃八幡平の最高地点を過ぎたが、雨風が激しい。之は台風六号の前駆であった様だ。廃坑になった松尾鉱山では硫化ガスに犯された枯木が痛ましい。朝来ガイド嬢が巧に飽かせずに道案内してくれたが、この辺りへくると旅の疲れで一同コクリョクリ。厨川の古戦場を左に見て盛岡を過ぎ、十八時花巻温泉のホテル花巻に到着。立派なホテルだ。開宴直前に十和田で参加予定であった古田夫妻が駆け付けて一段と賑かになる。総勢十九名、御馳走に酒ははずんだが歌が出ない。故人となった大西君を始め賑かな連中の不参加で氣勢をそがれたらしい。食後は麻雀と囲碁に夢中。

八月廿四日(日)

昨日の雨は嘘のように晴れて紺碧の空。九時バスにて出発し十時半中尊寺着。暑い中を藤原氏三代栄華の跡を探る。毛越寺で「夏草や強者どもの夢の跡」という芭蕉の碑を見たが、添田君がこの句はここではなく関ヶ原を吟じたものであると異説をたて、バスの中で論戦活発。識者の御意見を伺いたいものだ。中食は一の関でとり、

敵美溪を見る。石英安山岩より成った岩は水際に屹立し、その中を激流が奔り風光明媚である。

十五時半高着。瑞巖寺に詣り

住職五雲老師に相見。本堂にて亡十五級友の追善供養を厳かに営んで頂く。老師の御案内にて山内拝観。ついで老師の御配慮による棧船にて湾内を一周する。松は美しいが水は少し濁っている。ホテル大観荘に落ち付く。鈴木君が最後の夜を共にすべく先着している。宴会には老師も出席して頂く。山海の珍味にて酔いが廻るにつれて歌も出始める。宴酣に思いもかけぬ老師の大漁節も出て賑かに夜は更けてゆく。

翌廿五日は切符の都合で、朝食を早く済ませて仙台に出て駅頭にて解散。大多数は九時発の特急に帰京。西の方は東北にゆく機会が少ないので少し強行軍ではあったが、今回の企画は御夫人方には好評であったようだ。寄る年波にて明日をもわからぬ命、今後は級会は毎年開催することになったことを付記する。

参加者  
 伊藤、宇野、西本、古田、町田柳父(以上夫人同伴)、足立(卓)、石垣、大西夫人、鈴木、添田、長安、野際、福岡、楳田、吉田(十二名) (福岡記)

